# ホルスタイン種育成牛の傍正中切開による尿膜管摘出手術の１症例

東播基幹家畜診療所
○廣瀬春菜　齋藤隆文　中村善彦　三谷　睦　是枝明博　山崎　肇

牛の尿膜管遺残では，臍部異常の他に頻尿など排尿障害も本疾患を示す重要な臨床症状である。本疾患は，処置の遅延により上行性の感染が進行する危険性があるため，早期摘出が必要とされる。今回，尿膜管の遺残と，膀胱の大網や腹壁への重度な癒着を認めた１症例に対し，傍正中切開による尿膜管摘出術を実施し，術後良好な経過と膀胱機能の回復を認めたので報告する。

**材料および方法**

6ヵ月齢，雌，体重 200Kg(推定)のホルスタイン種育成牛。臍部からの排膿の他，頻尿および背弯姿勢などの症状を伴ったため，臍部後方の下腹部のエコー検査を実施した。摘出手術は 2%キシラジン鎮静下にて仰臥位にし，乳頭前方の傍正中を尿膜管と膀胱の連絡部位が目視できるまで切開した。尿膜管は癒着した周辺組織と鈍性剥離し分離した。臍部側は膿の漏出を防止するため臍開口部皮膚を閉鎖縫合し，周囲皮膚を楕円形に切開，さらに筋層から腹膜を切開し，臍部膿瘍を腹壁と分離した。膀胱の一部と尿膜管の連絡部位を膀胱側で切除し，尿膜管と遺残臍帯を一括して摘出した。切開開放した膀胱先端は二層の内翻縫合にて閉鎖し，常法に従って閉腹した。その後，7 日間抗生物質の全身投与を行い，術後 12 日目で抜糸した。排尿行動を確認し，10ヵ月齢で，再度エコー検査を実施し膀胱の形態を観察した。

**結果**

術前エコー検査の結果，遺残した尿膜管に牽引され変形した膀胱を描出した。尿膜管は拡張し内部に膿汁様所見を認めた。また，正中付近で尿膜管と腹壁との癒着を疑う像を描出した。開腹手術の結果，尿膜管は正中付近で腹壁に癒着し，膀胱を臍部側に牽引していた。膀胱は骨盤腔内で大網や周辺組織と重度に癒着していた。尿膜管内には多量の膿汁が貯留し膿瘍を形成していた。術後経過は良好で，翌日から自然排尿が認められ，頻尿などの排尿障害は徐々に消失し，現在育成中である。エコー検査の結果，膀胱内に膀胱憩室等の異常は認められず，排尿時正常な膀胱の収縮を確認した。

**まとめ**

本症例では，遺残した尿膜管と腹壁など周辺組織との癒着部が膀胱を強く臍側に牽引していたことが排尿障害を引き起こしていたものと考えられた。また,癒着部を鈍性剥離し，切開･縫合した膀胱壁が正常に機能していることをエコー検査において確認できた点から，本術式における膀胱機能への影響は極めて少ないと考えられた。牛の尿膜管遺残では，本症例のように，遺残した尿膜管の多くが正中付近で癒着していることからも，傍正中切開による早期摘出が第一選択であると考えられた。